

## 令和6年度東京都広報コンクール 写真部門 総評

### 箭内委員

今年度の当コンクール「写真部門」への参加自治体数は、15区15市2町、計32区市町となり、昨年度の31区市町を上回りました。皆様方にはお忙しいなか、広報活動の発展と向上にご尽力いただき、改めて感謝を申し上げます。

さて、すっかりアフターコロナの世の中となった2024年。その世相を反映するように、応募作品のテーマはコロナにまつわる事柄（復活・再開も含めて）から完全に離れ、各地域の特性や個性を存分に活かしたバラエティ豊かなものへと変わりました。言い方をかえれば、「日常に戻った」といえるのかもしれませんが。東京都各自治体が本来お持ちの魅力は実に多彩であるということ、皆様の力作から再確認することができました。

今回の審査中、改めて強く感じたのは、コミュニケーションの重要性です。ここでいうコミュニケーションとは二通りあり、一つは撮影者とモデル（被写体人物）の関係性です。今年度は、両者のコミュニケーションのあり方を意識させる作品が多数ありましたが、その中でも、例えば府中市組写真（バレーボール少女たち）のように、両者の良好なコミュニケーションによるイメージ共有があってこそ生まれたであろう、笑顔と訴求力に溢れた「プレー風ポートレート」は、見る者を紙面へと引き寄せる強いインパクトを残し、実際に高評価へと繋がりました。

もう一つのコミュニケーションは、撮影・デザイン・印刷といったワークフローにおけるコミュニケーションです。撮影者、デザイナー、編集者、印刷担当者といった各クリエイターが、紙面での完成形をイメージ共有することで、目指す紙面へとより近づくことができます。各紙、紙質によってインクの乗り具

合や発色も違いますし、使用できる紙幅の違いもあるでしょう。それらを逆算しながら写真をレタッチし、文字を組み合わせ、明暗や色を整えつつ、印刷にかける。こうした点に細かな配慮がある紙面は見た目にも美しく、読者の目を引きまます。総じて高評価に繋がった作品からは、これらのコミュニケーションがうまくとれている印象を受けました。

逆に勿体ないと感じたのは、肝心の広報紙になった段階で暗い印象になってしまっている紙面です。上記ワークフローのコミュニケーションが円滑であれば、更に良い紙面になったと思われる作品が複数ありましたので、刷り上がった段階でどのような色味になるのかといったイメージを、ぜひ気にかけていただけたらと思います。

次に撮影技術面に触れたいと思います。昨年同様に、極端に評価の低い作品が少なかった点が印象的でした。現場の状況に応じて ISO 感度を調整する、シャッタースピードを調整する、ストロボを使う、といった基本への配慮が感じられる作品が明らかに増加しており、とても好ましく感じております。どのレベルに達しても露出の基本は重要ですので、ぜひその基本を大切にして、更なる創意工夫へとつなげていただけたらと思います。

調査票「撮影データ」の記載漏れもだいぶ少なくなりました。撮影時の露出が果たして意図的であったのか否かなど、詳しいデータは審査の上で重要です。技術面という評価項目がある以上、たとえ素晴らしい作品であっても、撮影データが不明だと審査の妨げになりかねません。撮影時のデータは jpg ファイルのプロパティに情報が残っていますので、詳細不明の場合には、ぜひそちらを参照していただけたらと思います。

1 点、スマホによる応募作品がありました。こちらは、繊細な被写体人物をおもんばかり、ゴツイー眼レフからスマホカメラにかえて撮影し、モデルの柔らかな表情を撮ることに成功したという作品です。スマホが各段に進化している昨

今ですが、当コンテストにおける審査員として、一眼レフやミラーレス機を取材時のメイン機材に推奨する姿勢に変わりはありません。ただ、今回のようなケースや、以前の応募作にあった災害時撮影、動物園飼育員による動物撮影のように、臨機応変なスマホ撮影による良作は、評価に値すると考えます。

最後に、キャプション・文字情報についてですが、当コンクール<写真部門>の興味深い点は、写真部門でありながら、文字情報も審査対象である点です。写真の効果を最大限に活かしつつ、いかに文字情報をバランスよくリンクさせ、読者の目と心を紙面にひき寄せるか。そのためには、シンプルであれ、長文であれ、印象的な言葉選びとデザイン・レイアウトが重要であり、入賞作品はいずれも高レベルでそれらを実現させています。優れた入選作品の数々を参考に、今後の紙面作りの向上へと活かすのも、一つの手ではないでしょうか。

以上、本年度も全ての応募作品と真正面から向き合い、審査をさせていただきました。中には、ちょっと辛口になってしまった評価もありましたが、それらはひとえに今後への期待や、前年の作品が高評価だっただけに更なる飛躍・向上を目指して欲しい、という願いの表れであると受け止めていただけたら幸いです。

改めまして、本年度も多数の力作をご応募いただき、誠にありがとうございました。

ぜひ、これからも地域の皆様のために、素敵な広報紙をご制作ください。

## 鳥原委員

行政と住民を繋ぐ広報紙は、インターネットが完全に普及した現在でも極めて大切な媒体である。いくつかの調査に目を通した結果、いずれもそのように指摘されていました。ただし高齢者ほどよく読む一方、若い世代にリーチすることが課題だともあります。身体的条件や生活環境が異なる読者を対象にした紙面づくりは、きわめて難しいものです。すべての世代にとって役に立つ紙面とはどのようなものか。積極的に手に取り、また読んで理解してもらうために何が必要か。参加されたそれぞれの紙面には、この課題を達成するためにユニークな工夫が込められていました。

とくに印象に残ったものを挙げると、一枚写真の部で足立区の清掃員の方々を捉えた表紙は設営設計が行き届いていて完成度が高く、武蔵村山市の子どもを捉えたものはタイミングが絶妙でまさに「決定的瞬間」です。組み写真の部では中野区ではマンガのコマ割りでフェスティバルの進行を臨場感豊かに表現していました。府中市はどちらの部門でも見事な結果を出しており、これは撮影からレイアウトまで一貫したデザインポリシーが貫かれていること示しています。このように上位に入賞した作品は、しっかり基本を押さえているため工夫がより生きています。

その基本について、あらためて確認しておきましょう。まず撮影にあたっては構図を幾何学的に整理し、視認性の良さを確保すること。人物でも風景でも、対象の表情に焦点を当ててその質感を捉えること。照明について、意図しない限り強いコントラストを避けること。また状況説明のためではなく、実感を伝えるために写真を使うように心がけてシャッターを切ってください。なぜなら基本的に写真は説明に向かないからです。説明を試みるとフレーム内の情報が過剰になり、視認性と訴求力を損ねることが多いのです。

こうして良き素材としての写真を確保したうえで、はじめて良きレイアウトが組まれます。その段階では写真と文字組みとの関係を、できるだけシンプル

に、しかしメリハリをつけて整理してください。また写真のうえに文字を被せると視認性はかなり落ちるものです。じっさい、そのような紙面も散見されました。撮影担当はレイアウト担当とよく打ち合わせをし、紙面設計についての考えを共有しておくことが肝心なのです。

ページ数の限られた紙面に掲載できる情報は限られています。肝心な点は、住民にとって広報誌はあくまで行政サービスへの案内だということ。関心を引き、興味をもたせ、記憶させ、そして行動に移してもらう。その動機づけに力点をおいた紙面づくりが求められているように思います。